

久喜市にゆかりがあり、全国的に活躍されている方を紹介する「久喜の人じまん」。第1回は、「アンナチュラル」や「MIU404」の演出を務め、テレビドラマや映画のプロデューサー・監督として活躍中の塚原あゆ子さんです。

interview

作品の中で「郷愁」や「ふるさと」を思い描くときは  
久喜市の風景が浮かびます

## 塚原あゆ子

Ayuko Tsukahara



「MIU404」が話題になっていましたね。最終回はとてもドキドキしました。塚原さん ありがとうございます。プロデューサーや監督というお仕事について、具体的な内容を教えていただけますか？

塚原さん プロデューサーと監督では細かく役割が分かれているのですが、私の場合は大まかに言うと、台本を作り、配役を決め、撮影や編集をし、音を入れて、テレビや劇場で流すという、作品の全体像を見ていく仕事です。

—撮影の現場で役者さんに「もっと、こういう風にしたら方が」といったような話もされるのですか？

塚原さん はい。私から役者さんに「もっと、こういう風にしたら方がいいんじゃないか」とか「脚本には、こういう意味で書いてあると思うよ」といったことを伝え、相談しながら演技を決めていきます。

—ドラマや映画の世界に興味を持ったきっかけは何だったのでしょうか？

塚原さん 子どもの頃、母が中学校で演劇部の顧問をしていたんです。部活に連れて行ってもらったり、地元で劇団が来てくれた時には観劇に行ったりと、幼い頃から何となく演劇が身近にあったことが大きいと思いますね。それでお芝居に興味を持ち、縁あって就職活動で、ドラマや映画を手がけている会社に採用していただきました。

—子どもの頃の経験がきっかけだったんですね。そのほかに、久喜市で過ごした学生時代の思い出はありますか？

塚原さん 中学生の時に部活で陸上をやっていた、中長距離だったので、10kmマラソンのようなものを毎週やっていた。畑や田んぼの中の道を走っていたので、畑に風が流れていくところや稲穂がなびくところ、そういった原風景が、今の私の作風の中に色濃く根付いています。高校へは電車で通っていたので、久喜駅の周辺や、緑とオレンジの電車を見ると「懐かしいな」とか、胸をつかまれるような思いがします。作品の中で「郷愁」や「ふるさと」を思い描くときは、そうした久喜市の風景が浮かびます。

それからお祭りですね。山車がたくさん引かれていて、人がぎゅうぎゅうにいて、浴衣を着て行って、同級生とすれ違って。あの体験はすごく誇らしいです。

—久喜市の風景が作品に関係しているなんてとても嬉しいです。学生時代の経験で今も生かされていることはありますか？

塚原さん 小学生のときに絵本を作る授業があって、それで褒められたという思い出がすごく心に残っています。褒められたことがきっかけで、大きな自信につながったり、将来の可能性を感じたりするものだと思うのですが、そういったことは小学生時代に育てていただいたなという感じがします。中学生の時には進路のことで先生からアドバイスをいただいて今につながっていますし、小中学校の



「MIU404」撮影現場での1枚

久喜市出身。TBSスパークルエンタテインメント本部ドラマ映画部プロデューサー・ディレクター。「夜行観覧車」「Nのために」「重版出来！」など数々の話題作で演出を務める。平成30年に「コーヒーが冷めないうちに」で映画監督デビュー。令和2年にはテレビドラマ「グランメゾン東京」で東京ドラマアワード2020演出賞を受賞。また、これまでの功績により、文化庁の令和2年度芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞した。

現在、4月20日放送開始予定のTBS火曜ドラマ「着飾る恋には理由があって」を手がけている。

先生との出会いが、自分に大きく関わっているなと思いますね。

—貴重なお話をありがとうございます。最後に、市民の皆さんへメッセージをお願いします。

塚原さん コロナ禍で、まだまだ外出が難しいと思うのですが、世界は決して閉じていないし、むしろ昔よりもたくさんの人と出会えるチャンスが、インターネットや色々なコンテンツを通じて広がってきています。私がついていくドラマや映画も含めて、同じ出身地の方にも届けたいし、他の国の人たちにも久喜市の良いところを見てほしいなと思います。